

はなやか関西～文化首都2015～
「街道を活かしたまちづくり」シンポジウム

開会挨拶

近畿地方整備局建政部長 寺本耕一

本日は、土曜日の午後という大変お忙しい中、「はなやか関西～文化首都2015～『街道を活かしたまちづくり』シンポジウム」にご参加いただきまして、まことにありがとうございます。また、このシンポジウムの開催に当たりまして、開催地としてさまざまなご協力をいただきました長岡京市の中小路市長を初め、同市職員の皆様、関係者の皆さんに対しまして、この場をかりて厚く御礼申し上げます。

この「はなやか関西～文化首都2015～」は、関西のまちづくりの方向性などを示した近畿圏広域地方計画に基づくプロジェクトで、この関西の特徴である文化の集積を生かして関西を文化首都圏として発展させようという取り組みの一環でもございます。これまで、「お茶の文化」「人形浄瑠璃」「関西の食文化」といったテーマで行ってきましたが、こゝとは「街道」をテーマにしております。街道は、古来より多くの方々が往来し、物資が流れ、情報・文化を発信してまいりました。そして、歴史的な町並みや景観、伝統文化を生かした人々の暮らしなど地域の魅力が集約されていると思っております。この街道の魅力を幅広く伝え、地域の活性化、地方創生、ひいてはこの関西の成長発展につながるよう一緒になって取り組んでまいりたいと考えております。

本日は、大山崎町歴史資料館の福島館長の基調講演、東近江市と京丹後市でご活躍の2団体からのご発表、京都嵯峨芸術大学 坂上教授をコーディネーターとして4名のパネラーを加えたパネルディスカッションを予定しております。

最後になりますが、今回のシンポジウムが、街道を活かしたまちづくりでご活躍の皆様やこういうことにご関心のある皆さんに対して今後の取り組みの一助となることを祈念いたしまして、私からの挨拶とさせていただきます。

本日、限られた時間ではございますが、最後までお楽しみいただければと思います。

本日は、この長岡京市に大変多くの皆様方にお越しいただきまして、心から歓迎申し上げますとともに、ご盛会をお祝い申し上げたいと存じます。また、この長岡京市を開催地として選んでいただきました国土交通省近畿地方整備局の皆様方を初め、関係の団体の皆様方にも心から感謝を申し上げたいと存じております。

きょうのテーマは「街道」でございます。この長岡京市はその名前のおり、古くは弟国宮（おとくにのみや）、そして「泣くよウグイス平安京」の10年前には長岡京の都が置かれるなど、古くから交通の要衝として陸路、水路ともに非常に恵まれた交通の利便性が非常に高い都市として大きく発展してまいりました。

また、寺社仏閣も四季折々の名所がございます。ちょうど今、長岡天満宮では梅の花が咲き始め春の兆しを感じるころですが、もう少しするとキリシマツツジ、乙訓寺ではボタン、夏には楊谷時（柳谷観音）のアジサイ、秋には光明寺の紅葉と、いろんな自然資源、歴史資源に大変恵まれた地域であります。また、特産のタケノコは3月から5月にかけて旬を迎えます。

また、古くから交通の要衝としても栄えてまいりましたが、昨年、全線供用開始した京都縦貫自動車道、それと交差する阪急京都線の西山天王山という新たな駅もできました。それに加えて、高速道路と直結した西山天王山のバス停もございまして、1日80便以上が走っております。京都のおへそのような位置というのが今の本市が置かれている立地特性ではないかと思っております。そういう意味では、自然や歴史、文化、交通の利便性に恵まれた長岡京市、きょうは限られた時間ではありますが、皆さんにもそのよさの一端にも触れていただけたらと願っている次第でございます。

先日、文化庁の京都への移転が政府の方針として発表されました。まさにこの国の文化のかなめが京都にやってくる、このことは関西全体にとっても大変大きな起爆剤になるのではないかと期待もしております。きょうのシンポジウムが、これからの文化、街道を中心としたまちづくりについて有意義なものとなりますことを心から祈念して、私の冒頭の歓迎のご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

基調報告

街道の成り立ちと果たしてきた役割

大山崎町歴史資料館館長 福島克彦

きょうは、街道が歴史的に果たしてきた役割を、西国街道というルートを使って考えていきたいと思います。

現在私たちは、高速道路や鉄道といった交通機関を使って人や物を運んでおりますが、この近畿地方、歴史的に畿内近国と言われる地域は、街道とか水運、舟運を維持してきたという歴史を持っています。例えば関東地方では、自然災害で道の場所が変わる、船着き場の場所が変わる、街道が変わるということはよく起こります。その歴史を見ても、初めは鎌倉が中心でしたが、北条氏は小田原に、徳川家康は江戸に拠点を変えましたので、そのたびに鎌倉に集まっていた道が小田原に、小田原に集まっていた道が江戸にというように、道も変遷していきました。ですので、発掘調査をしますと、その時期しか道が通っていないので、時期が特定しやすいわけであります。

ところが、関西の場合は、平安京の時代からずっと同じ道を使ってきました。今風の言葉で言うと、インフラが1,000年以上積み重ねてつくられてきたということになります。最近の研究で大津の瀬田の唐橋の川底に古代の礎石が見つかりましたが、ということはほぼ同じ場所に橋がかかっていたということの意味します。同じ橋、同じルートをずっと維持してきたという歴史をたどっている、そこに近畿地方の歴史があるということを実感します。そこで、西国街道をもとに、そういったところを説明させていただきます。

まず、古代です。奈良時代は平城京に都があったころから山陽道（西国街道）はつくられておりました。奈良を北に上がって、行基のつくった山崎橋を越えて、山陽道を使って九州に向かうというルートになります。その後、長岡京は水陸の便がいいということで都が移され、さらに平安京ができますが、このときも山陽道を使って九州へのルートがつくられていました。所々に馬を飼う駅家（うまや）が設けられ、馬継ぎで情報を送ったり、時には外国人の使節も利用するというので、山陽道は大変整備されていました。平安京ができたときには久我縄手という直線の道もつくられて、西日本と結ばれていました。中でも水陸の便のかなめになったのが山崎です。山崎橋と山崎津は、舟運と山陽道が連携する大変重要なポイントでした。

このルートは、中世になると若干変わってきます。鎌倉時代には幕府が鎌倉に、室町時

代には京都に置かれ、大山崎では油売りが活躍していました。西国街道は播磨（現：姫路）に向かう道ということで、「播磨大路」あるいは「播磨大道」と表現されていました。

このころ、大山崎の人たちは街道沿いに集落をつくっていきます。五位川保とか溝口保、岩上保など「保」と言われる地縁的な共同体が鎌倉時代には既に成立していました。こういった単位が追いかけるられるところは日本の歴史上でも滅多にありません。逆に言えば、街道を行き来する旅人とエゴマ油をめぐるいろんな関係があったことが想像できます。このころには舟運と分離していきませんが、西国街道沿いには淀川の渡し場があって、渡し場から対岸の八幡とか樟葉などに向かうことはできました。

江戸時代になると、西国街道の名前が変わります。特に乙訓地域で言われているのが「唐街道」という言葉です。向日市、長岡京市、大山崎町で使われているようですが、豊臣秀吉が朝鮮出兵をしたときに京都から中国大陸に向かったルートという意味で「唐街道」という表現を使ったようで、京都の東寺口から大山崎まで続いていたことがわかっています。ちなみに、向日町というまちはこのときに成立したと言われております。

17世紀の前半には、離宮八幡宮が拡張して西国街道沿いを取り巻くような形で作られました。離宮八幡宮は山崎の人々の信仰が深く、地元の住民たちが八幡宮境内の清掃活動を文化10年のころから行っていたことがわかっていますが、幕末に起こった禁門の変で町場や八幡宮は焼けてしまいました。大山崎の文化財が結構焼けてしまったという大変残念な事件ですが、前近代にはそういった歴史を西国街道及び大山崎周辺はたどっています。

西国街道は、京都の東寺口から大阪市内を通らずに西宮、神戸に向かうルートを指します。これは古代の山陽道というルートにまた重なってつくられています。

近代以降、このような道に沿って鉄道が建設され、明治9年（1876年）には神戸－向日町間が開通しました。向日町は京都府で一番古い駅で、2番目が山崎駅です。しかも、駅は西国街道とつながっている場所、クロスする場所に設けられています。古い地図を見るとその様子がわかりますが、古い街道を重視しながら鉄道ができ、駅ができたということが考えられます。

この後、昭和3年に新京阪電鉄の京阪新京阪線（現：阪急京都線）ができます。昭和3年というのは昭和天皇の御大典があった年で、京都が行われる昭和天皇の即位式に大阪のお客さんを大量にスピーディーに運ぶために敷かれました。このときにできた東向日駅や大山崎駅も西国街道とクロスするところにあります。ですので、街道は鉄道の建設にも大きく作用していると言えると思います。

このような駅の近くには道標がつくられております。江戸時代からつくられていて、阪急大山崎の駅前にも水無瀬離宮はこちらという碑が立っています。当時の人々が神社やお寺を参拝するための道標や記念碑、石碑がありまして、街道沿いを探索すると当時の観光的な流れなどもわかります。

ここからは映像を見ながら実際の状況を見ていきます。

昭和5年につくられた山崎の街道の絵図です。屈曲しているところに山崎の東の黒門がありました。

私の資料館にある古代の山崎の400分の1の模型です。山陽道は、平安京から九州の太宰府に向かう今で言えば国道1号線に当たるような道で、この道沿いに天皇の別荘の河陽離宮や駅家がありました。山崎橋があって、陸上交通があって、山崎津という港があって、天皇の別荘があって、山城国の国府があって、駅家があるということですから、郵便局があって、天皇の別荘があって、乙訓の総合庁舎があるというようなイメージでしょうか。今でも長岡京や山崎には高速道路や鉄道が集まっていますし、山崎にはジャンクションもあります。そういう要素が歴史的にも同じような雰囲気であつたと言えます。

西国街道を歩いていくと、屈曲しているところに昔の集落があります。これは、人を入りにくくするためです。

東の黒門は、秀吉と光秀が戦った山崎の合戦のときに、秀吉軍の先陣の高山右近が陣取っていたところで、まさしく山崎の合戦が始まった場所です。

街道沿いには、石敢當や、幕末の相撲取りである高瀬川清兵衛の記念碑、集落の出入り口には魔除けの石も置いてありました。街道沿いだからこそ、こういうものがよく置かれていたということです。

山崎の町には国境があります。西谷川で京都と大阪に分かれますが、昔でいえば山城国と摂津国の境界になります。そのように昔からここは国境の町でありまして、それを体感することができる街道であるとも言えます。平家が都落ちをするときに、この国境を越えたところで、八幡宮に向かって、もう一回京都に帰らせてくれと祈る場面が「平家物語」にあります。都落ちの雰囲気を漂わせる場所として当時の人にも意識されていたということです。

山崎の西の黒門で、これは島本町に入っています。

離宮八幡宮の門前に立っている道標は元禄5年（1692年）のものになります。徳川綱吉

の時代ですが、元禄年間の資料というのはかなり古いもので、西国街道沿いの道標としても1番目か2番目に古いと考えられる道標です。ここには「右西国道」とありまして、右に行くと西国道、左に行くと橋本渡しという分岐を示しています。

街道は昔のいろんな絵に描かれています。これは幕末の絵で、黄色い帯の西国街道沿いに家がずっと並んでいる様子が見えます。その真ん中には離宮八幡宮があります。笹井家本という洛外図屏風には、淀川と天王山に挟まれた山崎のまちの集落が描かれていますし、宝積寺の絵図にも街道が描かれています。

現在、離宮八幡宮には、華やかかりしころの宝塔の礎石や、宝塔の裏には、菅原道真が太宰府に流されるときに腰かけたと言われる石も残っております。本当に腰掛けたかどうかはともかく、山崎に立ち寄ったということは伝承で伝えられています。街道沿いですから、いろんな人が往来しているということです。

離宮八幡宮の境内図です。昔は大変大きな境内地で、西国街道は境内地を迂回する形でつくられていました。また、油売りの信仰のよりどころでもありました。

古代には山崎津（港）があったという話をしましたが、江戸時代になると、天下の台所と言われる大阪が発達し経済の中心になっていきます。淀川の水運によって品物や荷物が大阪から京都に届けられるようになり、山崎には大阪からの陸揚げの場所もつくられました。これがきつねの渡しや山崎の渡しです。渡しの近くには問屋も設けられ、乙訓周辺や丹波方面に馬で荷物が運ばれていきました。つまり、山崎は、大阪と乙訓あるいは丹波方面を結ぶ中継地点としても重要なポイントで、水陸の便が生き残って続いていたということです。

ここから神足（長岡京）の話をしていきます。長岡京市では、国の登録有形文化財である旧石田家住宅をふれあい町屋として維持、活用されています。

街道沿いには、山崎一淀という道標や元禄13年につくられた愛宕灯籠などが残っています。

西国街道は今、真っすぐの道に整備されていますが、実は江戸時代には非常に細い道でした。この道が一番重要なルートで、現地見学会で学芸員が一番こだわるのはこういうところですし、お客さんも昔の道を歩くと喜ばれます。

当時の街道を歩く人の姿はいろんな絵に残っています。鎌倉時代後半に描かれた「一遍聖絵」には、山崎周辺を歩く人々や秤棒を担ぐ油売りが描かれています。また、室町時代に描かれた「地藏菩薩靈驗記絵」には街道沿いに御茶屋さんが描かれていて、当時の

人たちあるいは京都の周辺の街道にはお茶が大事な存在だったことがわかります。西国街道の入り口の東寺口でも、お茶を飲んでいる場面が出てきます。

現在、地元のふるさとガイドの会の方々が地元の小学校と子どもたちと西国街道を歩くということをしています。子どもたちにとって、西国街道は通学路なんです。「君らが通学路で使っている道は、長岡京の時代からずっと使っているんだよ。紀貫之も通り、藤原定家も通り、菅原道真も通り、秀吉が通り、光秀が通った道なんだよ。そんな道を君らは通学路にしているなんて、うらやましい」という話をするんですが、子どもたちはもうひとつよくわからない顔をしています。

歴史街道推進協議会の皆さんと連携して、ここ4～5年、西国街道のリレーウォークを行っています。京都府、大阪府、兵庫県という広域連携の展開事例で、山崎にも阪神間のお客さんがたくさん来られています。このように西国街道を歩きながら、交通機関やインフラ整備、地域社会について一緒に考える、文化財をどう生かしていくかということを考えていただきたいと思っています。さらに、今後は街道を時間をかけて歩く滞在型の観光の流れも必要になってきますので、資料館をその仕掛けとして利用しながら、歴史街道の啓発事業を皆さんと一緒に考えているところです。

西国街道の歴史と啓発活動についてお話をさせていただきました。皆さんの街道に対する関心が深まればと思う次第です。ご清聴ありがとうございました。

街道を生かした観光振興の現状についてお話をさせていただきます。

東近江市は、琵琶湖の南東部、滋賀県の中央に位置し、10年前に八日市市を中心に1市6市が合併して、非常に広大な面積で市が営まれています。人口約11万5,000人、滋賀県内4番目の都市です。主な産業はものづくりと一言で言い切ってもいいぐらい、農業、林業、工業です。特に工業は工業団地への工場誘致が成果を見ております。東に鈴鹿山脈、西に琵琶湖があります。

紅葉の東近江として有名で、永源寺、湖東三山の百濟寺、大風祭りの八日市、白洲正子の「かくれ里」の石塔寺や石馬寺、近江商人発祥の地と言われる五個荘、琵琶湖の水郷の町集落伊庭、この辺が観光資源となっております。

観光の現状は非常に苦戦しておりまして、年間入り組み客数17万人、宿泊者数3万人ですから、どこにでもあるような観光地と言っても言い過ぎではありません。「見えない東近江市の顔」ということがよく言われます。

観光で苦戦している原因です。1つ目は地域条件で、ものづくりの成功体験があったため、観光に余り注力してこなかったことです。2つ目に過去の延長線上の活動からの脱皮が不十分なため、受動的な体質で、近隣の彦根市、長浜市、近江八幡市と比べても専門性を磨く取り組みが見劣りしています。3つ目に受け入れ体制の弱さで、食や遊といった観光インフラが不十分な状況です。

このような現状を踏まえて今取り組んでいるのは、地域主導型観光への転換です。これまでのように旅行会社やバス会社、マスコミ等の広告だけでは集客できない、通過してしまうという現状を踏まえて、我々がグリップを握ってやっていくために次の3点を目指しております。1つ目は知名度アップのためのブランドの構築、2つ目は近隣市と連携したプロモーション活動や宣伝、誘客活動、3つ目は攻めの体制づくり、特に情報発信力の再構築と着地型観光です。きょうは着地型観光での街道歩きについてお話しします。

私どもの着地型観光の目標は5つあります。まず、全コース語り部つきです。ボランティアガイド、学芸員、大学の先生などさまざまな方を語り部に迎えて、この地ならではの話をさせていただきます。2つ目はストーリー重視で、シリーズ化や通年化など1回きりで終わらないように奥行きを持たせています。3つ目は地域主催ならではの企画や体験で、

地元の協力を得て、普通のお客様がいきなり行ってもできないような体験を用意しています。

ことしのツアーのメインはウォーキングツーリズムで、特に街道まち歩きが安定した支持をお客様から得ております。その他、ハイキングに近いパノラマウォーキング、信長の「信長公記」をたどるツアー、白洲政子さんの「かくれ里」のとおり回るツアーなどがあります。また、おいしい果物がとれますので、JAの方の話を聞きながら完熟の果物を果樹園でとる愛東フルーツ物語も進めております。ことし2年目で、実績は41件、ほぼ毎週末に何らかの形のツアーを出して、ことしは1,500名を超えました。

私どもの主な素材は、歴史、自然、文化、近江商人のような東近江独特のもの、産業としては工場誘致、環境に優しい町としても売り出しています、「街道」でくくれるものがたくさんあります。街道は、その地域の歴史や文化の結集、あるいはその原点になると考えています、まさに東近江の魅力と触れ合うことができるのが街道ウォークの魅力だと考えています。

ここから、実際に現場でお客さんを迎えてご案内しておりますボランティアガイドの目から見た街道について紹介いたします。

東近江市は、東海道と中山道をつなぐ御代参街道と鈴鹿の山を越えていく八風街道という2つの街道がクロスした市街地になります。

蒲生地区、八日市地区、湖東地区には、大津の宮ができました600年代から700年代にかけてたくさんの渡来人がきました。特に蒲生地区には石工の技術を持った人が根づき、石像の文化が見られます。その最たるものが石塔寺です。紅葉で有名な永源寺は臨済宗永源寺派本山になりますし、愛東地区には聖徳太子が創建した百濟寺があります。

我々ボランティアガイドは、1市4町でそれぞれ活動してきましたが、東近江市が行政施行10周年を迎えた27年4月に5支部が1つの協会に統合し、現在64名のメンバーがおります。

ここで街道の資源についてご紹介します。

まず、滋賀県全体に近江七弘誓がございます。那須与一の7人のお子さんが出家して建てた7つの寺で、五個荘金堂の弘誓の瓦には扇の的の紋がありますし、6つのお寺のご住職のお名前は那須さんです。

また、東近江市は奈良、京都に近いので古墳がたくさんございます。

ヴォーリスが設計した建築物が東近江の市街地に1つがきれいに残っています。

601年に聖徳太子が大阪の四天王寺を建立するときに、箕作山の土で10万8,000枚の瓦を焼かせたと言われています。また、8のつく日に市を開いたのが八日市の名前の由来で、市神神社には商業の神様が祭られております。

この道標は江戸時代な中ごろのものですが、刻印がはっきり残っています。

大凧も江戸中期から連綿と伝承されていて、今も百畳の大凧を揚げます。

引接寺には、滋賀県出身の石田三成縁のものがたくさんあります。

御代参街道沿いにはちょっと変わった背の高い道標があります。

その他、万葉の聖地、太郎坊、鉄道の本社などがあります。

現状の問題点は、一般的に知られていない、通過地になっている、物産店が少ない、リピーターが少ない、観光スポットが点在するためコースづくりが難しいなどが挙げられます。

対策は、歴史街道として整備する、ホテルをふやして滞在型を図る、市の観光協会、ボランティアガイド協会、商工会など地域ぐるみの連携です。ご清聴ありがとうございました。

NPO法人わくわくする久美浜をつくる会

京都府の一番北部の京丹後市久美浜町からやってまいりました。平成16年に6つの町が合併して一番端っこのまちになり、今では人口も1万人を切っています。

山を越えて西へ12キロで城崎温泉、東へ40キロで宮津市の天橋立、南へ30キロで出石と、非常に有名な観光地に着込まれております。非常に景色のいいところですが、名前を全部とられておまして、落ち込んで水までたまっています。小天橋という景勝地は「小さな天橋立」という意味ですが、3キロの天橋立に対して7キロと倍以上の大きさを誇ります。ただ、日本三景で有名な天橋立に遠慮して卑屈になっているのか、小天端という名前がついています。近くには夕日ヶ浦温泉があります。

和銅6年(713年)に丹波国から丹後国が分かれて、丹後ができました。3年前に丹後成立1,300年を迎えたという古い歴史を持っております。三方が山で北が海ですので、街道がないと外につながりません。街道の重みは長岡京市さん以上にあるのではないかと思います。

久見浜湾は出雲族や古代日本海ルートによる渡来人の往来が多く、磐座祭祀の行われた縄文遺跡も残っており、権力を持った豪族がいたと考えられています。函石浜遺跡からは中国の古銭も出土してしまして、久美浜は海と船によって成長してきた地域です。

やがて後白河法皇の荘園になりまして、都との交通も開けましたし、中央との関係もございました。

近世には一色氏、細川氏、京極氏がおさめました。江戸期後半には久美浜代官所が設けられ、豪商と組んでまちづくりをしたという歴史が散見されます。また、久美浜城の城下町という顔も持っておりました。

明治になって、丹後、但馬、丹波、播州、美作まで含めた5カ国20村の久美浜県庁所在地となって繁栄しましたが、遠過ぎるということで4年で終わりました。明治9年には京都府になって今の久美浜の町になりました。京都府熊野郡の中心地としてそれなりに発展しましたが、平成の合併で端っこの町となって、平成10年以降、若干衰えを感じているところです。

江戸時代に街道がクローズアップされます。宮津海道、豊岡海道、播州海道とありますが、千石船が来て豪商の蔵が建ち並んだと言われます。

明治の終わりに10年かけて水路の拡張工事を行い、久美浜一城之崎間の航路が開通しま

した。城之崎に船で行ったという話が残っておりますが、昭和4年に鉄道が開通して以降は鉄道がとってかわり、まちは大喜びであったという記録が残っています。

そのような歴史ある街道、まちの中心の道路、商店街の道路、この街道を整備することが、この地域のまちづくりイコールであると考えて取り組んでまいりました。平成13年に旧久美浜町が久美浜一区の活性化事業を提案したところ、豪商稲葉本家を当主の稲葉様が久美浜町に寄附されたため、ここを観光拠点にしてやってきました。この稲葉様は、明治時代中期、納税額が京都府で1番、土地所有面積1番というすごい豪商で、鉄道のお金もほとんど出しています。それが原因で没落も早まったという話もありますが、「おまえも悪よのう」の豪商ではなくて、いい豪商です。

あわせて、国交省の町並み環境整備事業を10年間とりまして、住民組織である久美浜一区まちづくり協議会を立ち上げました。その活動を通して、建物の改装を届け出制にしたまちづくり協定やまちづくり基本計画をつくり、豪商稲葉本家をオープンさせました。ただ、にぎやかさが足りないということで、23年にはNPOを立ち上げてソフト面の活動も始め、昨年には京都府の力も得て府道を美装化し、まちはかなりきれいになりました。まちの中心には川が流れ、まちづくり協定で修景した修景家屋が転々とできております。

きれいになったまちで何をしようかということですが、豪商稲葉本家を活用した観光的な取り組み、着地型観光、ガイドを養成してまち歩きを推奨し、歴史・文化を発信・発掘しようということによってやっております。また、区長会とも協力して、安全な生活道路・通学路の取り組みもしております。

観光資源としては、稲葉本家、寺社、かぶと山の大文字、花火、灯籠流し、夏祭り、奉納太鼓台、ひな祭りなど、いろいろあります。美しい久美浜湾で船に乗ったり、お酒を楽しんだり、うまいものを発信したりしております。このしろ寿司、鯛せんべい、牡蠣、もずく、なまこなど非常にうまいものもございますので、お酒の好きな方はぜひ来ていただきたいと思います。

まちづくり協議会は官製的なものでしたので、5年前にわくわくする久美浜をつくる会というNPOを立ち上げました。

今後は、空き家の活用、移住者・定住者の増加を目指しておりますが、なかなかです。ただ、この4月に京都から30歳代の夫婦が移住してきて、空き家を活用してイタリアンを開いてくれることになっておりますので、ぜひ食べに来てください。さまざまな観光的整備を加速させ、地場産業や他の組織と一緒に、産物をふやしたり、販路を拡大したり、新

しい商品をつくったりという取り組みをやっていきたいと思っております。

また、久美浜病院という非常にいい病院もございます。医療・福祉・介護のまちとして、すばらしいふるさとづくりをしていきたいと思っております。

女性の皆さんや若い方の力も活用して、ますます元気なまちにしていきたいと思っております。

この12年間の活動の中でいろんな言葉に出会いました。いろんな要素、取り組みの切り口がありますが、まずは町並みをきれいにして、そこでまず自分たちが知って楽しむ、そしてお客様に感動を味わってもらえるようなまちにしていきたいと思っております。街道は住んでいるまちの中心です。そこが安心安全で楽しくないと、住んでいる者も元気が出ませんので、住民の皆さんや隣のまち、地域とも連携していきたいと思っております。2年前からは「海の京都」という追い風が吹いています。久見浜湾の遊覧船、小天橋と夕日ヶ浦温泉の協力、ガイドの幅も広げながら今後も取り組みを強めてまいりたいと思っております。どうもありがとうございました。

パネルディスカッション

街道を活かしたまちづくりのあり方

○坂上 ただいまよりパネルディスカッションを始めさせていただきます。

まず最初に、自己紹介させていただきます。

私は関西生まれの関西育ち、いわゆるメード・イン関西です。学生時代から、関西が活性化する、関西がにぎやかになる、華やかになることを目標に仕事をしてまいりました。日本総合研究所からは東京へ来いと言われましたが、東京には興味がないとはっきり断ってずっと関西で活動させていただいて、今は京都の芸術大学で教鞭を執らせていただいております。文化、観光のいろんなプロジェクトに携わってまいりまして、この場にいられることも大変うれしく思っております。

きょうの会の趣旨をもう一度説明いたしますと、平成21年に近畿圏広域地方計画が策定されました。関西の国土をいかにつくっていくか、まちづくりをどのようにしていくかの方向を示している計画で、その主要なプロジェクトの一つに文化首都圏プロジェクトというものがございます。文化首都というのが関西の目指すべき方向であるという結論のもと、我が国の創生にかかわる歴史・文化はもとより、伝統技術、景観、自然、食といった日本を代表する有形・無形の資源、これらの本物を大事にして、まちづくり、ものづくり、人づくりを通して新たな本物を生み出す風土を醸成していく、そのために関西の文化の魅力や美しさを広く発信し、国内外を問わず多くの方々に関西を訪れていただき、我が国を引っ張っていく、そういう文化首都圏の形成を目指すもので、国は非常にすばらしい考え方を示していると思います。

このプロジェクトに基づいて、23年より毎年テーマを決めて関西のさまざまな文化の発信、振興に取り組んでおります。これまで、お茶の文化、人形浄瑠璃、食文化といった関西を代表するテーマを取り上げて、ホームページや Facebook を活用して情報発信したり、ゆかりの地を訪ねる企画ツアー、そのテーマの研究者にお集まりいただき、きょうのようなシンポジウムを行ってきました。

関西は、古代から近世にかけて日本の政治、経済、文化の中心でした。数多くの歴史文化資源が存在し、国の国宝の約6割、重要文化財の5割が関西に集積しております。そして、人々の交流を支えた街道の多くが関西の起終点となっています。そこで、「はなやか関西 文化首都」というテーマで魅力ある歴史文化遺産に関する取り組みを行う

こととして、ことしは街道にフォーカスを当てて、歴史的な町並みの維持や文化の伝承に積極的な取り組みをしている自治体と連携し、関西の魅力を発信する取り組みを進めているところです。今回のシンポジウムもその一つとして開催しておりますので、ご理解いただければと願うものであります。

それでは、シンポジウムを始めさせていただきます。まずはパネリストの皆様から、自己紹介を兼ねて取り組みのご報告をいただきます。トップバッターは、歴史街道推進協議会の井戸様、よろしくお願いいたします。

○井戸 私は歴史街道推進協議会という団体に所属しておりますが、歴史の専門家でも街道の専門家でもありません。私が30年近くやってきたのは地域連携です。その中でおまへのやっていることの脈絡がよくわからないと言われることが多いので、そこから説明します。

1つ目は、線の連携です。堺屋太一さんのアイデアに沿って始めた歴史街道のプロジェクトが、もうすぐ30年になります。2つ目は、面としての関西をどうしていくのか。関西は中央部、北側、南側の3つに分けるのがわかりやすく、現実的な連携ができるのかなと思っております。3つ目は、関西が文化首都の自覚を持って全国の地文化を引っ張っていくという意味で、数年前に世界文化遺産の地域連携会議をつくりました。京都市長が会長で、関西にしながら各所とのネットワークを持って、さらに日本をよくしていくというものです。

きょうは歴史街道について、まずはそのメインルートからご説明します。これは文化首都関西のシンボルとなるルートをつくろうという構想で、必ずしも歴史的な街道を指しているわけではありません。7世紀までの神仏習合と日本の成立の伊勢、飛鳥、山辺の道、法隆寺、奈良時代の奈良というふうに、時代を追って横綱、大関の観光地を双六のように結ぶ1つのシンボルをつくろうというアイデアでスタートしました。日本史の各時代の舞台となった場所を21カ所選んで、歴史街道と呼ぼうという運動です。この間、ご当地長岡京市さんの西国街道整備、大山崎の表示板の整備など、各地域や整備局と連携して行ってきました。それと同時に、スタンプの設置やコースの設定、ボランティアガイドの連携等、ルート上にさまざまなものを張りつけていくソフトの作業も20年ほどかけて行ってきました。

ただ、関西全部でやるという話ばかりではなかなか次のステップに行けないということで、都道府県の境をまたいだエリアの中で、重要な歴史資源を中心として、またそれ

らを結ぶ街道を中心として共同事業の立ち上げも行ってきました。今のところ、阪急電車、JR、京阪電車、西国街道、京街道、淀川等々ばらばらでやっていますが、こういうものが協力できる体制にしていきたいと悩み続けた30年です。

もう一つ、北側は淀川と接点があります。高速道路が環状に結ばれたのを機会に、数年前から近畿の北側の連携にも取り組んでおります。細川ガラシャが丹後とつながっていたり、継体天皇が福井とつながっていたり、天王山、安土城、明智光秀というようにいろんな歴史のネタが転がっておりますので、広域連携することでどうプラスにしていくなかというのが私の仕事です。

歴史資源、まちづくりの運動、観光客の流れをくくっていけるのが街道のよさですし、街道がまちづくりの核になると思っております。きょうは楽しみにやってきました。どうもありがとうございました。

○坂上 関西に歴史街道推進協議会があつてよかつたなと今感じているところです。

次に、枚方の田中様からご報告いただきたいと思ひます。

○田中 枚方宿地区まちづくり協議会が立ち上がったのは平成11年です。枚方宿は東海道57宿の56番目になります。57ではなくて53ではないかとよく言われますが、徳川幕府が伏見宿、淀宿、枚方宿、守口宿の4宿を延ばしました。そして、8代将軍吉宗、6代藩主の宗直公のときから、参勤交代の際に、徳川の権威を示すため、参府するときも帰国するときも枚方宿に泊まったと言われております。その枚方宿地区まちづくり協議会、一般社団法人くらわんか五六市代表理事をさせていただきます。

平成11年に立ち上がり、12年に協議会になったときは、自治会、商工会議所等、行政主導でした。その中に私はぽつんと1人入れられたのですが、建物が建っていればまちはあるというのが私のイメージでした。しかし、回を重ね、いろいろなところに視察に行くことにつれ、行政によるハードな修景は成り立っていても息づかいが感じられないというか、にぎわいが無い、それは自分のまちも同じだ、自分も何かしなければならぬなと思ひ始めました。

そこで、街道をにぎわすためにはコミュニケーションをとらなければならないということで、一緒にガーデニングをし、ジャズコンサートを開き、街道菊花祭を開きました。それで確かに多くの皆さんが街道に集まってくさいますが、ほかの日は静かな街道のままだったんです。これではにぎわいづくりにはなっていないということで、枚方市駅から枚方公園駅までの1キロほどのところで五六市という手づくり市を平成19年から開い

ています。毎月第2日曜日の開催で、40店舗ほどからの出発だったのが、今では300～400件の申し込みがあり、250店舗ほどが街道に並んでいます。まちづくり、にぎわいづくりを目標にしていますので、ほかの団体ともさまざまに連携して、夏は花火大会や浴衣での水まき、秋祭りなどを行っていますし、ほかの地域とも連携をとることができるようになっております。

以上です。

○坂上 東海道五十七次というのは私もきょう初めて知りました。56番目の宿で、現代の生活文化の街道としてよみがえってきているなと感じました。

続きまして、竹内街道で活動しておられます松倉様、お願いいたします。

○松倉 私は大阪府の職員で、出向で葛城市で働いています。なぜ大阪府の職員が奈良でと思われるかもしれませんが、そのきっかけとなった竹内街道・横大路の取り組みを紹介させていただきます。

竹内街道・横大路は、「日本書紀」に、613年、難波より京（都）へ至る大路を置くという記述がございます。当時の難波は今の難波宮公園、都は、推古天皇の時代で飛鳥にございました。これに続く大路を置いたということで、日本国家として最初に道をつくった日本最古の官道と呼ばれております。

なぜL字型になっているかということ、昔の地形と大きく関係がございます。昔、大阪平野は河内湖という海でした。半島のように出ている上町大地の先っちょが難波宮で、難波津という大きな港がございました。この難波津が朝鮮（中国）の文化の入り口で、その半島を南下して今の堺のあたりで竹内街道に入り、二上山、竹内峠を通過して都に通じる文化を運ぶ道でもあったのです。

では、なぜこの時代に国家事業としてこの道がつくられたかということ、大陸の情勢が大きく影響しています。6世紀から朝鮮半島では高句麗、新羅、百済の国家間の争いが激しくなり、また中国の大きな圧力が朝鮮半島に及んでおりました。日本にも大陸の圧力が及びつつあったため、国家事業としての大きなインフラ整備が必要だったのです。

写真で沿線の状況を見ていきます。難波宮は今、公園として整備されています。それを南下すると四天王寺という聖徳太子ゆかりのお寺ががございます。仁徳御陵が堺にございまして、金岡神社で方向を東に向けてこの街道は奈良へ向かいます。金岡神社には「大路」という碑が残っています。日本武尊の御陵と言われる白鳥御陵を通り過ぎ、太子町に入って聖徳太子の御陵がある叡福寺、二上山の脇を通り抜けて葛城市に入ります。葛

城市には中将姫伝説で有名な当麻寺、5月には練供養会式というお祭りも催されます。また、葛城市は相撲発祥の地と言われています。当麻蹴速と野見宿禰が2,000年前に垂仁天皇の前で初めて相撲をとったと言われておりまして、あした白鳳が葛城市に参りますので、ご興味がございましたらぜひ来てください。

続いて、竹内街道の終点となる長尾神社、ここからさらに東に道を進めると横大路と名前を変えます。この街道は伊勢参りにも使われましたので、常夜灯が数多く残っております。大和高田市、橿原市と横大路を進んでいくと、近鉄の八木付近で下ツ道という北からおりてくる道と交差します。これが最古の交差点とも言われております。八木の札の辻を南下して飛鳥のほうに向かいます。今、飛鳥の都の小墾田宮は駐車場になっています。

このような歴史あふれる街道の沿線にある大阪市から飛鳥までの10の市町村、そして奈良県と大阪府が加わって12の自治体が活性化の委員会をつくりました。首長が集まってサミットも行いました。

このような多くの団体が集まりますので、共通のコンセプトをつくりました。その中で重視したのが、市民、企業、大学が参画・連携・協働し、シビック・プライドを醸成する、つまり地元の方々に自分のまちを好きになっていただくということです。このコンセプトのもと、芸大にはロゴをつくっていただき、辰巳琢郎さんを招いて地元のワイナリーや酒蔵のPR、写真家の織作峰子先生にお願いして、地元で活躍している人々を紹介していただく写真展も開催しました。リレーウォーキングは、既に地元でされていたウォーキングを竹内街道・横大路というコンセプトでつなぎ合わせて、広くアピールしました。また、この沿線は光関係のお祭りが非常に多いので、光のバトンタッチということで広域的に連携していただきました。緑の一里塚は、地元の方々が休憩し憩えるスポットで、植栽と道標をつくりました。また、歴史街道の景観が残っているところでは、大学と協力してまち歩きをして、自分のまちを再認識いただくような活動もしました。

このようなことで、産官学民が力をあわせて、自分のまちを再認識し、みずからの力でまちを変えていこうというきっかけになればと思っております。ちなみに、予算は行政はゼロ、全て企業協賛です。ありがとうございます。

○坂上 日本の街道の出発点の活動ということを感じました。特に関係者の協力がすばらしいなど。それから、シビック・プライド、住んでいる人たちの気持ちが必要だという

ご報告がございました。

では、福島さんからよろしく申し上げます。

○福島 ほかの方々のお話をもとに、文化財の活動について振り返ってみたいと思います。

大山崎町は、15年ほど前に、向日市、長岡京、大山崎町、対岸の八幡市とともに観光振興事業を行ったことがあります。そのときに、これからの観光事業は身の丈に合った観光を考えていかなければいけない、それには継続的に行える仕掛けと住民参画型であることが必要だろうということが議論されました。皆さんのお話から、そういうことがほかの自治体でも進んでいるということが実感できましたし、それぞれの活動から自分の自治体でできるものを学ぶことは大変大事な意味合いを持っているのではないかと思います。

私どもの資料館でもボランティアガイドの方々が大変活躍しておられますが、単に大山崎町の文化財を見たいというだけではなく、ボランティアの方々が生き生き活動されている、楽しそうに勉強されているというところから、リピーターがふえてくるという一面があります。今後、そういった生涯学習という面もプラスして観光事業を進めていくことが必要だろうと思いますし、そこで私どものような博物館施設等が果たす役割は大変大きいのではないかと思います次第です。

また、東近江市も久美浜もそうですが、いろんな文化財がある、つまり、1つの時代とか1つのテーマではなく、複数のテーマがたくさん眠っているということだろうと思います。その複数のテーマのうち、ことしはこれをやろう、来年はこれをやろう、再来年はこれをやろうというふうに継続的にできるだけ豊富な文化財や歴史、文化に関するネタがあるということを実感した次第です。例えば枚方には町場がよく残っておりますが、枚方元町には枚方寺内町という戦国時代のまちとして大変有名なところも残っていたりします。そのようにいろんな切り口から文化財を生かすことで、継続的な事業を展開することができるのではないかと思います。

竹内街道等についても、歴史街道推進協議会さんが飛鳥・奈良・京都というテーマで連携事業をされております。古墳とか平城京など奈良時代までの古代の歴史をテーマとされることが多かったんですが、平成26年度には戦国時代を取り上げられたところ、結構お客さんが来られたんですね。そのようにいろんな時代層の切り口で継続的に行っていくことも可能なのではないかと。そのときに生涯学習施設とか文化財がどういう形で役割を果たすかということは大変大事なことでありますので、地元の教育委員会や博物館

と連携していくことも重要ではないかと思えます。

もう一つ、西国街道沿いの道を実際に歩ける地図を歴史街道推進協議会が作りました。西国街道沿いの博物館施設が情報交換をしながらつくったわけですが、実はこういったマップは竹内街道さんが先につくられておりました、それを参考にさせていただいたんです。こういうものをほかの地域でも広げていくことが必要なと。きょう、街道が大変大事だということがわかってきたわけですが、では、江戸時代の人はどこを歩いていたのかというと意外とわからなかったり、難しかったりするんですね。ですので、地元の方や文化財博物館の施設の方々と協力しながら道を探っていくこともおもしろいだろうし、そういうことをする中で、1つの地域だけじゃなくて隣の地域も歩いて回れるようなマップをつくっていくということもできるのではないかと思えます。そういったところで継続的に物事を進めていくことの意義が言えるのではないかと考えますし、そこで文化財とか博物館施設が果たすべき役割について私たちもしっかりと考えていきたいと思えます。

○坂上 我々はこれから未来に向かっていくために、街道を通して歴史を振り返り、あすの活力につなげていくことが非常に重要ではないか、そのあり方が問われているということであろうかと思えます。そこで、皆さんのご報告を受けて、これからどんな取り組みをしていこうとされるのか、未来に向かってのお話をお伺いできればより元気になれるなどと思えます。街道を生かした今後の取り組みの展開についてご発言いただきたいと思えます。

○福島 街道を歩けるようにする、実際にどこを通っていたかを知るためには、江戸時代の地図を発掘していくことが必要になります。きょう取り上げた大山崎町の資料は資料館の展示の中でわかってきたものですし、長岡京の地図は長岡京の市史編纂事業の中で確認されたものです。そういうものを写真撮影してデータとして残しておいて、すぐに使えるというようにしておく、データをきちっと集約しておく、そういう引き出しを幾つもつくっておくことが大変大事なことでないかと今回課題として改めて感じました。

もう一つ、他の自治体さんでは町屋という建物を有効活用されているなど感じました。大山崎町はそれができていないのですが、そういうものがきちっと残っているところは、それをどう紹介するか、どうやってそこを発信基地にするかということについて既に実績を持っておられますので、そこは自信を持って発信していただきたいと思えますし、

逆に、それを私どもは学んでいきたいと思った自体です。

○坂上 街道を生かす手法として2つのご提案をいただきました。古地図の発掘と活用、残っている町屋の活用、この2点が有効ではないかというお話でございます。

続きまして、松倉様、お願いします。

○松倉 私はこの竹内街道の活動をしている中で、東京のリクルートの「じゃらん」の人から、「1,400年ってすごいですね」と言われたんです。僕は関西に住んでいるから、そんなことは全然思ったことがなかったんですが、東京の方から見ると、1,000年以上の歴史を有する地域というのは大変なことで、実際、関西ぐらいしかないんです。ですので、関西の人は、文明が発祥した地域だということにもっと誇りを持つことが大事だと思います。これはすなわちシビック・プライド——自分の地域に誇りを持って好きになることにつながります。自分はこんなすばらしい地域に生まれ育っているんだから、さらによくしたいという思いを持ってもらうために、例えば歴史のことをもっとPRする、特に子どもたちにそういうことが必要かなと思います。

歴史資産というのは、多くの方々が「それいいね」と言えるコンセプトになりますし、行政、企業、地域の方々、大学をくっつけるコンセプトにもなり得る素材だと思います。また、街道は広域的につながることができます。そこを通過して多くの方々が往来したということは、昔から交流があったということですから、多くの地域を結びつけることができる要素もあると思います。

きのう、人口減少ということが新聞でも大きく出ていましたけれども、これからは単独の企業とか市町村という団体では生き残れないと思います。だからこそ、自分の一番得意なところを生かす形で人々が結びついて、地域がより活性化していくようにしていかなければいけないと考えています。我々は行政ですので、やりましょう、やりましょうと余り言ったらいけないなと実は思っています。地域の方々の声によく耳を傾けて、何をやりたいかを見きわめ、それをサポートする仕組みを行政としてはつくっていかねばいけないと思っています。

○坂上 1,000年の歴史を持つ関西、我々はもっと自分たちに自信を持たなければいけないというご提案をいただきました。

続きまして、田中様、お願いいたします。

○田中 五六市を一番最初にやったときに、年に1回のにぎわいではだめだと感じました。今では月1回の開催で、多いときには1万人来ていただけますが、その次の日には全然

違う景観になっています。毎日3,000人、5,000人のにぎわいではなく、行き交ってるな、息づかいが感じられるなというまちにすることが一番の目的なので、それが今のところの課題です。そこで、街道に菊人形を並べるとか、古い資料をいろんなお店に置いてもらっていつでも見てもらえるようにするとか、ツーリストやボランティアガイドと提携して見て聞いて食べてもらうとか、少しでも毎日にぎわうようにしたいと思っています。

五六市でお店を並べてやるということ自体が、地元の人々の協力、人とのつながりが大切だと実感します。自分たちがやるだけでは全然だめなんです。もちろん来場者さんにもいい枚方宿でありたいですが、やはり私たちの子どもや孫たちがずっと住み続けていきたいと思えるまちにすることが必要だと考えて、そういう活動もしています。また、高齢者の方が家に引きこもらないように、何かに携わってもらって、住んでいる方に楽しんでもらえる、やりがいを持ってもらえる五六市にしたいと思っています。

町屋については、外観修景を31件、うち9軒の空き家をお店にしましたが、枚方宿は空き家がなかなかないんです。登録される方は多いんですけども、用意する側が少ない。あいたとしても、五六市でいただく出店料だけでは町屋を買えませんので、行政にお金を工面していただく役をしていただきたいのと、枚方宿の拠点づくりにも力を貸していただきたい。そして、拠点ができたらそこに館長さんみたいな方を据えていただきたいというのが今の私の希望です。

○坂上 やっと官の出番が出てきました。生活目線からの日常的な継続性というあたりで非常に魅力的な活動をされているなと感じました。

最後に井戸さんからどうぞ。

○井戸 いろんな意見が出て、頭の整理もできてよかったなと思っています。

それぞれのまちの住民にとって街道って何か、いろんなパターンがあると思いますが、観光客の方が来られればご商売がにぎわう方もいらっしゃるし、楽しければいいという方もいらっしゃる。それから、シビック・プライドという話がありましたが、もっと翻訳すれば、地域の文化力を高めて、おたくのマンションの値打ちを上げましょうという話でもいいと思うんです。シビック・プライドの方、楽しむ方、観光の方、こういう方々が一緒になって歴史を最大限に活用するという文脈が関西にはあって、その中にいろんなものを結びつなぐ街道があるということだと思います。

全国街道交流会議という全国組織がありまして、私は関西の理事として参加するんですけども、関西はレベルが高いなということを感じました。よく考えて、

あるものをうまく生かしてやっていらっしゃるなと思いましたので、できればきょうが、各街道のキーパーソン同士の交流のスタートになって、今後もより発展していけばと思います。例えば、今はそれぞれのまち、それぞれの街道でウオークラリーをやっていらっしゃいますが、そういうものをうまいことコーディネートするだけでも相当なことができるという気がします。

あと、緑の一里塚の話がありましたが、大阪府さんが1口3万円で「竹内街道」という看板をつくられたり、マップの原型をつくられたんです。その後、大阪府さんのお金がなくなってうちが引き継いだという経緯があるんですが、ないならないなりにやれることはあると思っております。

私は全国の街道とか古道を見ていますが、文化庁さんが「歴史の道」という金属の標識を一時期すごくつくったんですけれども、今では全国各地の景観荒らしの元凶とされています。引き抜くに引き抜けない状態で、何千本と立っていると思いますけれども、逆にすごいのが奥の細道で、棒が1本立っているだけです。そのように、余り大きいものでなくてもいいので、そういうものを立てていく運動をみんなでしようとか、交流してアイデアを交換する中で、できそうな事業があるなということに気づきました。きょうが交流のスタートになればいいなと思っております。

○坂上 関係者のキーパーソンが集まってもう少し交流して、情報を整理して、関西から楽しい魅力的な情報を発信すればというご提案をいただきました。

議論には余り出ませんでした。東近江さんからは観光という重要なキーワードをいただきました。歴史街道さんは30年間活動をされていますが、継続性と観光客みたいな点でアドバイスはございませんか。歴史街道がなぜ30年も続いているのか、ちょっと不思議に思うんですが、いかがでしょう。

○井戸 難しい質問ですが、関西にはいろんな担い手がいらっしゃって、いろんなイベントがあります。ウオークも毎日いろんなところでされていますが、それがうまく整理されていないし、ブラッシュアップされていないし、しかも急に決まったりするんです。例えば10月第1週は京街道さんですよということであれば、関西街道フェスティバルと銘打って、みんなそれに合わせて開いてもいいじゃないですか。それができそうでできないというのが、この間非常に苦しんでいるところです。

観光に関しては、歴史が好きな方とか年配の方を中心に考えがちですが、最近新しいウェーブが出てきています。草津宿のある方が先頭に立って、NSD69（中山道69）と

いうことで宿場町の人気投票をしているんです。それは非常に期待できるなと思っています。

○坂上 過去を守るだけでなく、イノベーター、改革、革新で新しい人たちとどうつながっていくかということがキーワードになるかと思います。

○松倉 今の観光は、景観地を見ていくだけではなくて、地域の産業を結びつけるということも重要だと考えます。今、民泊の話が出ていますが、農家に泊まって、耕作放棄地を利用して農業を体験するツアーなど、担い手とまではいかずともサポーターをつくる力が観光にはあると思います。文化財が何個あるかじゃなくて、その地域の特色として体験できるものには何があるのかという観点から見ると、地域産業の活性化にもつなげることができるのかなと思ったりします。我々の葛城市も耕作放棄地は多いので、そば打ちをやったりとか地域の方は頑張っておられます。そういう形で多くの人たちを地域に呼び込む一つの手段にはなり得ると私は思っています。

○坂上 観光が第三の住民に変わっていく、そのきっかけとして街道というテーマが使えるのではないかということでした。他にいかがでしょうか。

○福島 今朝も資料館に出勤してきましたが、9時半ぐらいには東京のお客さんが来られるんですけども、来てすぐ帰られるんですね。観光が消費になってきているというか、すぐに次の場所に流れて行って、じっくり見るということがない。

先ほどから滞在型とかお金を落とさせるという議論がありましたが、お客さんの顔色を見てみると、そういうものを求めている方もいらっしゃる。もう少しゆっくり見たいのにといいのは感じられますので、食と絡めるとか、農業との連携とか、私どものような資料館であれば講座と組むとか、そういうことも考えて、観光を単に消費で終わらせるのではなく、地元を知ってもらって延長線上に消費があるという流れをつくっていくことが必要だと思います。それは今のお客さんは実感されていると思います。

うちの資料館も、20分で説明してくれと言われることも結構ありますが、その20分間で、例えばうちの図録を買ってもらおうようにどう持っていくとか、いろいろ考えるんです。そういうふうにして少しでも知ってもらって、お金が落ちるといって流れをつくっていくことが必要じゃないかと思っています。

○坂上 単なる文化的な消費だけではなくて、とフローからストックに地域側としてどう変えていくか。リピーターというキーワードが東近江さんからも出ていましたが、地域の愛好家を外部につくるのが重要かなと思います。観光の場面では、特別の興味を持

つ専門的な人たちにまちにやってきてもらうスペシャル・インタレストツアーというのが1つの方向としてありますが、そういう人たちをターゲットにするという課題も出てきております。

田中さん、出店されるのはどういったお店なんでしょうか。

○田中 手づくりの品とかこだわりの品ですが、大きな会社はだめというルールはあります。食品も、最初のころは自分でつくられたものを出していただいていたんですが、保健所さんの検査が入って難しくなりまして、食については最初の趣旨とは少し違う方向に向かっています。それでも、雑貨とか陶器など、自分がつくられたものを出していただいています。

枚方市以外の方も出店されるんですが、既存の店をふやしていきたいというのが私たちの望みなんです。しかし、既存の店に出していただくためには、そこで自分たちの生活が成り立っていないといけないので、もっともっと人に来てもらうことが課題だと思っています。

枚方にも文化観光協会がありますが、よそ様のように、ここという観光地が枚方にはありません。私たちが五六市をすることで、次の時代の人たちがつながって、枚方市全域でいろんな活動をし始めてくれているんですけども、そういう人たちに、リピーターをふやす方法を考えていく力を養ってほしい。何年か前までは旅行会社さんが五六市を見に来るバスツアーを組んでくださっていたんですけども、やはり五六市だけではリピーターにはつながらないんです。五六市のほかにも何かがあるということで観光につなげていくというヒントをきょうはいただいたと思います。

○坂上 きょうは幅広いご意見をいただきました。事例報告も2カ所からありまして、いろんな活動をされている官の方、歴史にお詳しい方、30年間ずっと歴史街道を見守っていただいている方、さまざまなご意見があったかと思えます。

日本の文化の発祥は道から生まれます。私たちが子どものとき、家の前の道で遊ぶ中でコミュニティができていました。多くの文化的な催し物では、日本の場合、道の上に行列というものができます。道は私たちの生活にとって文化を発する空間であり、その意味で街道は重要な役割を持っていたと思います。

多くの街道は、私たち日本人あるいは関西にとっての原風景の一部であろうかと思えます。原風景は、文化の発する中心、私たちが生きていく上で非常に重要なイメージがあります。文化というものは人を引きつける力を持っています。文化が発するところは、

人がやむなくそこへ行ってしまうという魔力を持っていると言われ、それを聖地と呼んだり、癒やしの地と呼んだりするわけですがけれども、文化を発するところは人の心を癒やす力を持っています。だからこそ、人類として記憶に残さないといけないものは世界遺産になり、私たちの日常の生活にとって重要なものは私たちの地域遺産、心の遺産につながっていくのではないかと思います。

我々日本人あるいは関西が未来に向かって進んでいくときに、地域を守る一つの指標として街道というものを意識しておく必要があるということが、きょう皆様からのご意見によって確認できたのではないかと思います。「はなやか関西 文化首都」は、街道からつくれるのではないかというお答えを皆さんからいただいたのではないかと私は感じております。

今後、街道を生かした文化の魅力発信、伝承、まちづくりをより効果的に行っていくためには、当事者である地域住民の活動や行政の方々の施策がより一層一体的になっていくことが必要不可欠ではないだろうかと思います。そういう意味で、きょう各パネリストの皆様からいただいたお話、大変価値あるものばかりであったとっております。今後、官民一体となって皆様それぞれのお立場で、関西の文化の力を盛り上げていこうということで、きょうのシンポジウムの取りまとめとさせていただきたいと思います。長時間ありがとうございました。

[了]